

氏 名	イワ イ マサル 岩 井 優
学 位 の 種 類	博 士 (美 術)
学 位 記 番 号	博 美 第 245 号
学位授与年月日	平成21年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉Cleaner's high－無題、Cleaner's high－カーペットの上で、 Cleaner's high－いつか舞台は片付けられる 〈論文〉ウロボロスの眩暈－循環に「ふれる」ための方法論
論文等審査委員	
(主査)	東京芸術大学 教 授 (美術学部) 保 科 豊 巳
(論文第1副査)	東京都現代美術館 住 友 文 彦
(作品第1副査)	東京芸術大学 准教授 (美術学部) 小 山 穂太郎
(副査)	〃 〃 (〃) 布 施 英 利
(〃)	〃 教 授 (〃) 坂 口 寛 敏

(論文内容の要旨)

現在私たちが暮らす社会は過剰な「流動性」と「複雑性」のもとで「循環」しているのではないだろうか。「流動性」とは、情報や商品がグローバルに流通する中で、新旧の入れ替わりが移ろいやすいことをさしている。「複雑性」とはあらゆる要素が過多となって、その他の要素と結合することができない状態であり、換言すれば「可能性」の行為不能(混沌)状態を意味している。そして、「循環(Circulation)」とは、社会の基底にある循環性(Circulative)を想定している。

私の考えでは、現在は時間軸上の単線的進化の結果としてあるわけではなく、不可逆的な循環によって構築されている。より具体的に述べるならば、資本主義世界で、私たちは否応なく優勝劣敗の市場原理というサーキット(Circuit)へと身を投じているのだ。本論では現在すでにある循環に変則性を持ち込み、循環を形態変化させていくための方法を提示した。

循環の形態を拡張・変更することは、いま・ここの循環に「ふれる」という、主体的な関わりを通して初めて可能になるだろう。日本語の「ふれる」は、音韻は同じであるが、三つの語義「触れる」、「振れる」、そして「狂れる」に分けられる。「触れる」は体に触れて存在が感覚的に分かることであり、出来事に出会ったり、あることを話題・言及することでもある。「振れる」は揺れ動くこと、また正しい方角からはずれ、一方に偏ることである。そして「狂れる」は物事が常軌を逸し、普通でなくなることをさしている。すなわち、私が本論文で扱う「ふれる」は三つの語義を重ねた動詞であり、行為主体者の視点からの「動き」であることを契機としている。

本論文の三つの章では、循環に「ふれる」という観点から、各章で私のこれまでの活動をまじえ、「関係の可塑性(触れる)」、「不確定な視座(振れる)」、「過剰な循環性の彼岸(狂れる)」を考察した。私たちが暮らす社会を深く見つめながら、過剰な循環を主体的な営み(主体的な循環性)へと転換するための方法を志向／思考／試行することが本論文の目指したところである。

第一章は私たちが循環に「触れる」ための基盤となる可塑的な関係性を論述した。私が考える可塑的なものとは、私たちが事物に直接的／間接的に触れていくことで、変化するものを指している。「触れる」ことで変化する相互関係は、他者が可塑的であるという信憑の基に成り立っている。私が、イランで制作・発表を通して体験した共有不可能な状態から、私が人に「触れる」ことで、お互いの差異に直面し、

さらに「出来事」が生起／継起する過程を示した。

第二章で私が論述する「振れる」とは移動／交通手段による距離的な振れ、社会における自らの立ち位置（ポジション）の移り変わりを意味する。私たちが好むと好まざるとに関わらず、移動は不可避にある。自らが異なるもの・場所との関わりによって揺れ動き、立ち位置／視座を振れざるをえなかった体験をもとに、私の内部規律（及び価値観）の変容過程をみる。すなわち本章における「振れる」とは、ディスコミュニケーション的状况を調整し続ける動的なものとして想定している。サラエボでの活動、グループワークを事例に、自らの内部と外部がともに「振れる」ことで、循環にひとつの作用を及ぼしたことを分析した。

第三章で、私は循環の「彼岸」へ橋架する動きを「狂れる」と捉えている。私たちの「日常」は、「非日常」さえも組み込まれた「日常」として存在している。その循環から「逃れる」ことや「逸脱」する余地はない。その上で、切り分けることができない「日常非日常」の暮らしのなかで、過剰のはてに生起する「狂れる」を考察した。本章で私が対象にするのは、消費や単純作業・単純行為や、私たちが当然のこととして受け入れている景色（循環的な景色）から、突如あらわれる空隙として「狂れる」ものである。このような過剰からの変移を、清掃行為を通して描き出した。

むすびに、各章で述べてきた「触れる」「振れる」「狂れる」自体が、循環的な動きであることを示した。それらの動きは、観るものの視点によって、暴力的であったり平和的であったり、異なる作用をもって現実にあられる。アートが社会に存在する意義とは、まさに循環が永遠でなく常時変化可能であることを示しつつ、循環と私たちを省察し、更新するための媒体となることにあるのだ。私の制作もまた、このような循環に対する抗いであり、解体と再構築の繰り返しによって循環に「ふれ」ている。

（博士論文審査結果の要旨）

本論文は、情報や資本がグローバルな流動性を加速させている現代社会を「循環性」が増しているものとみなす理論的な分析を背景に、論文筆者岩井の作品及びプロジェクトの成果をそうした社会状況のありかたと結び付けようとするものである。

「循環性」という言葉によって現代社会を考えることは論文を通して基軸となっている認識だが、これは単線的な進化が否定され循環的な時間性が前面化することや、いっぽうで地理的な広がりにおいても様々に張り巡らされた情報ネットワークによっても推し進められているというふうに、人間の生の総体を覆いつくすような過剰さをともなっていると考えられている。その無力感さえおぼえるような圧倒的な力への鋭敏な感覚は同時代への率直な反応として書き記されているように思える。そうした認識は筆者自身が経験してきたことから生じているため、理論的な考察と表現行為は具体的な結節点を持っていると考えられ、全体のまとまりをつくりあげている。

その際、哲学や社会学、コミュニケーション論の知見を援用しながら概念的な整理をおこなうために、「ふれる」という言葉を「触れる」、「振れる」、「狂れる」という三つの言葉に分けるアイディアは独自性を感じさせる論立てとして評価を受けた。構成としては、それぞれを個別の章において論考しつつ、自分の作品とプロジェクトが紹介される。まず、「触れる」のなかでは、「関係性の美学」という同時代の顕著なアートの動向に言及している。アートが日常との関わり合いのなかで、既存の固定化された関係性に少しさざ波をたてるこの動向と先行するボイスらの作品などに積極的な評価を与える。そして、イラン家庭に敷かれているカーペットに付着しているゴミや体毛などを掃除して回る自らのプロジェクトの紹介をおこなう。粘着シートに付いたそれらは最終的に微妙な色のグラデーションとテクスチャー

を持った平面作品のようにして展示される。ここで掘り下げられるべきだったのは、文化本質主義に陥らないための「関係性の美学」が逆に当たり障りのない相対主義に行き着く危険性への指摘である。アートプロジェクトとして実際に現場に関与する経験の中では必ず葛藤や矛盾が噴出してくるはずであり、そうでなければ「さざ波」によって他者を巻き込むことはできない。次章の「振れる」に登場するサラエボの町を裸で歩きながら捨てられているゴミを洋服のようにして身につけるプロジェクトも、まったく異なる歴史や文化を持つ共同体に身をおく経験から出発しているうえでは同様の指摘ができる。

その困難さに立ち向かううえでのひとつの実践例としては、個人ではなく複数の主体が参加するSurvivart（サバイバート）というグループの活動が挙げられている。企画メンバーと各トークイベントの参加者に、異なる視座を持つものが見解をぶつけあい、それがひとつの結果としてまとまるのではなくプロセスを共有できる形で実践することに重きが置かれている。

続く「狂れる」の章においては、近代において合理主義的な社会が形成されていくなかで監視や管理が徹底されるが、そこから排除されていくものへまなざしが向けられる。まずは理性の対象から外れる「狂気」が挙げられるのだが、それは特殊な精神状態なのではなく構造主義の理論が明らかにしたように境界線を形作る政治や経済、法、倫理などの諸力を分析することで特殊性は解体される。したがって、そこに非日常性をみるのではなく、日常との連続を見ようとする考えが示されるところは、前章までの異文化との接触において語られてきたことと比較すると一歩踏み込んだものに思われる。

そして、自らの清掃業務の経験も踏まえながら、同じように社会から忌み嫌われる「汚れ」を取り上げながらプロジェクトが考案された例が示される。それらは、清掃するうちに会場を破壊するものであったり、必要以上に収集をおこなうものであったり、分析を通して社会がみせる「過剰さ」を指摘してきたことと重なる様相をみせるものになっている。

この論文は、現代社会の全体像を素描とする現代思想的なアプローチを試みようとしており、やや筆者の手に余る幅広い対象がゆえに理論としての目新しさや精密さはないが、社会に対する等身大の感覚から作品やプロジェクトの実践に至る記述がその考察と共振する部分が説得力を作っている。とくに最終章において、最近作が考察によって後押しされるものとしても読めるところは、今後筆者が作品制作を行ううえで非常に有効な論考をおこなうことができたのではないかと感じさせる。そうした作品制作を批評的な視点によって分析する役割を持つ論文として高い評価を与える。

（作品審査結果の要旨）

岩井優の作品には常に現場がある。岩井は社会の過剰な複雑さや流動性のなかで循環しているものと我々自身と他者という存在を強く意識している。そして、いま・この循環に「ふれる」ことを“作品”というかたちで表していこうとしている。「触れる」「振れる」「狂れる」と3語のキーワードで“作品”の核となるものが示される。現場とはなにか？ 状況・活動・表現・等々がものとして決着をつけていない状態の提示、“作品”とはなにか？ ここに岩井の特性と魅力がある。

活動のなかで岩井は若い友人等の呼びかけを受けてボスニアに出かけるが、そこで何をしたらいいのか、何が出来るのか逡巡し、自分の位置を失う状況のなかで、作り手の主体性を放棄したかのように自身をその状況のなかに投げ入れた。裸になってボスニアの街角に落ちているもの、ゴミなどを拾い身に纏い、町中を彷徨いながらその状況を映像に記録している。(Sarajevo Look パフォーマンス、2003) 場を動くことで“振れ”ていき、そのような関わり方でその場に“触れる”のである。ここでは、作品も作品の制作過程も変容している。即興的なパフォーマンスは突飛な見え方をしている。しかし、起点となる自身のアイデンティティーやその場に居る根拠も失うような状況にあるという内実は明確に示されているのではないか。サラエボのゴミを身に纏い、サラエボの断片となっているのである。表象としてはサラエボという場とひとつながりのもの、その場所そのものになっている。

「Cleaner's high」と名付けられた作品では、掃除をしている。生活のなかで日常的な行為に着目し、そこから始まっている。テヘランでは「ころころ」という日本では馴染みのある粘着テープで埃を取る清掃用具を用いて、様々な家庭のカーペットを掃除して埃・髪の毛や繊維のくずを集め、それらで再度カーペットの表面を作ってみせている。同時にころころで掃除を行っている本人や現地の家庭の人々が写された写真が提示される。この埃・ゴミでできたものとしてのカーペットが作品の全てではない、その過程にあることを岩井が移動させていることに気づくのである。なんでもない日常的な物事を日常の域を超えて移動させている。

展示会場に洗剤がぶら下げられている。岩井は世界各国で製造されている洗剤を集めてきている。それは蛍光色できらめくような人工的な色合いで、原液は強力でそのままでは床や壁の塗装を溶解して剥がしてしまう程である。大量に集められた洗剤も、過度に行われた清掃も、その場に異変を起こす。

「Cleaner's high—いつか舞台は片付けられる—」と題された作品では、仮設の床面に映像モニターが仕込まれて水槽内で日常の食器や食物を次から次へと洗う様が見える。靴や書物や生きている鯉までも洗剤の泡にまみれている。岩井のパフォーマンスでは自らの髪も洗い、刺身を洗い、更にはその場で食べる。過剰さがあふれたその瞬間を岩井は“狂れる”という、この場には、可笑しさ、グロテスク、ユーモア、批評性もあり異質な開放感もある。

生の営みを揺さぶって見せている岩井の活動は、1960年代以降の社会変革を求める動きの最中でのアンガージュマン（社会参加／拘束）とも繋がる。現在の社会の問題意識を共有し、さらに、“狂れる”という際立ったところまでも進んでいく行動力とビジョンには秀でたものがある。博士としての高い評価に値する作品と認める。

（総合審査結果の要旨）

本論文は、作者の作品制作の背景に潜む現代芸術思想を論述したものである。作者の日常生活での営みや意識の母体である社会を、グローバル化され過剰な情報のネットワークの網を張り巡らされた循環構造をもつ巨大な新資本主義社会と捉え、作者はその過剰な日常の中でこれを乗り越えるための身体の獲得を説き、3つの「ふれる（触れる、振れる、狂れる）」とした多重の意味を持ったこの言語の複層性の中で捉える手法を提案する。作品はそこに作者自身の身体に触れさせるため社会とのコミュニケーションの手法として実現させるものであり、論文はこれに沿って論述している。

ひとつは、作者の巨大化する資本主義社会を「循環する社会」とフレーミングする事で導きだす仕掛けをあえて設定するという論点は美術家の制作のプロセスから導きだされていて独創的である、「ふれる（触れる、振れる、狂れる）」としたパフォーマンス手法のリアリティーは、のみによってささやかに社会に抵抗する表現者の言葉として、作品と共振するものがあり意味深い論述である。

文中で「本論文は個人の表現活動を論述するのみに趣意があるのではなく、私たちが暮らす社会を深く見つめながら、過剰な循環を主体的な営みへと転換するための方法を思考／志向／試行する事が本論文の目指すところである。」と論述しているように、作者はアートのあり方と役割は社会（現代社会での情報や商品の過剰な流動性と複雑性の基での現代資本主義社会における循環）との関係の中に成立するものであるとした立場をとり、自身の芸術に対する思考態度も明解である。

構成としては一章でのディスコミュニケーションと差異の体験を「触れる」事によって論述し、第二章では自らの異文化でのコミュニケーションでの振幅を作品制作を通じて論述している。

第三章では現代社会の日常での過剰性の果てに生起する「循環の彼岸」を考察して論述されている。作者は最後に「アートは人間と循環の関係性そのものを人間に省察させ、更新させる媒体なのだ」と結んでいる。

論文は各箇所の言語の解釈について粗雑であるとの指摘もあったが、各章を通じて作者の作品制作の

ために身体を投機して体験した実感によってつづられていて、創作者の実践的試行／思考のプロセスとしての論文となっており審査員の高い評価を得た。

作品はグローバルな現代社会における過剰な情報社会と様々な異文化の現場へ旅をしてそこに身を置いて、現場の日常に触れ自己の所在を思考する、行者のような行為から作品「On the carpet」、「サラエボルック」などのシリーズとして作品に結晶化している。作品表現は写真、映像、行為の痕跡などの素材を会場にインスタレーションし、作者の日常での社会に対する「ふれる」行為そのものの表出であり、作者自身の自問でもある。作品の表現行為は常に社会制度との軋轢との戦いの中に曝されていて、そこでの作者の制作行為や意思が作品の強さ、スケール、感覚、などの表現力を決定していく、作品はここで試されるのでありこれらの作品の完成度については審査員から厳しい意見も聞かれた。しかし、廃棄物を素材として使用した「Nust」作品やCleaner's highシリーズ「untitl」などの一連の作品での、会場の現場を行為によって変容させる作品においては美術の概念や美術での技術的な構成上のエレメントに頼らず新しい表現手法を試みようとして制作されており、この点では新たな次世代の芸術表現の地平を切り開く可能性を強く感じられるとして審査員の高い評価を得て学位を授与されるに値する作品であると判断した。